

作物名 小麦（秋播） 対象病害虫 一年生雑草

公所名：一関農業改良普及センター
担当者：大友英嗣

1. 展示薬剤名
シナジオ乳剤
【有効成分等】

有効成分	同左含有率	吸収部位	作用機構
トリフルラリン	33.0%	幼芽部、幼根部	細胞分裂阻害
IPC	11.0%	根部、幼芽部、茎葉部	細胞分裂阻害・呼吸阻害

2. 普及展示のねらい
小麦用土壌処理除草剤としての普及性（効果・薬害）の検討。

3. 普及展示方法

- (1) 展示場所

一関市第3遊水地区

- (2) 対象病害虫

畑地雑草（一年生雑草）※ツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科を除く

- (3) 耕種概要

- ア. 品種 ナンブコムギ
イ. 土質・土性 褐色低地土、埴壤土（前作：大豆）
ウ. 施肥 H25/11/1（小麦専用肥料50kg/10a）
エ. 播種日 H25/11/8
オ. 栽植様式 条間21cm（条播）
カ. その他 病虫害防除等の管理は農家慣行による

- (4) 普及展示規模

展示区 98.8a、対照区 68.2a

- (5) 散布時期、量、方法

薬剤名	処理時期	処理量（/10a）	使用方法
展示区： シナジオ乳剤	H25/11/9	薬量 400ml 希釈水量 100 ^{リットル}	全面土壌散布
対照区： ガレース乳剤	H25/11/9	薬量 200ml 希釈水量 100 ^{リットル}	全面土壌散布

- (6) 調査月日、方法

H25/11/4に処理前雑草調査、H26/3/31に処理後残草調査（除草剤処理後148日）、各5㎡×2か所、草種別重量

4. 展示成績

試験区	除草効果			
	H25/11/4		H26/3/31	
	雑草名	草丈(cm)	雑草名	草丈(cm)
展示区	なし	0	なし	0
対照区	なし	0	なし	0

試験区	除草効果				薬害の有無	薬害の程度	収量対行	総合評点	
	雑草名	H25/11/4		H26/3/31					
		重量 g/m ²	合計重量 g/m ²	重量 g/m ²					合計重量 g/m ²
展示区	なし	0	0	0	0	無	—	100%	A
対照区	なし	0	0	0	0	無	—	—	—

5. 考察

(1) 前年の残草状況

展示区および対照区ともに小麦の2年目連作圃場である。雑草はタデ類及びイタリアンライグラス等のイネ科雑草が少量発生するが、ノビエ等の水田雑草の発生は極めて少ない圃場である。

(2) 処理条件等

播種及び薬剤処理時は適度に土壤水分があり、圃場条件は良好であった。

播種が10月下旬の降雨の影響で、例年より10日程度遅れ、晩播での展示調査となった。

(3) 除草効果等

展示区及び対照区ともに、薬剤処理以降から越冬前(11/30:達観調査)にかけて雑草の発生はみられなかった。また、融雪後(3/31)及び4/21に雑草調査を行ったが、いずれの区も雑草の発生はみられなかった。いずれの区も雑草発生が見られたのは5月上旬頃であったが、発生時期および発生量に差はみられなかった(達観調査)。

(4) 薬害等

展示区及び対照区ともに薬害の発生は認められなかった。

(5) 作業性

担当農家から聞き取った範囲では、展示区と対照区で差は見られない。

(6) 備考

本剤の実証期間における特徴的な事象としては、①播種時期が例年より10日程度遅い、②根雪期間が61日間と平年より長い、③4月の降水量が平年より少なく(平年比73%)連続無降水日が25日間発生したことが挙げられる。このため冬雑草の発生が少なく、かつ春雑草の発生が遅れたものと推測される。

6. 普及性

対照区と同等の除草効果が認められると推測されるが、冬雑草の発生が少ない(春雑草の発生が遅れた)年の結果であることに留意する必要がある。

作物名 だいず 対象病害虫 マメシクイガ

公所名：中央農業改良普及センター（地域）

担当者：伊藤美穂

1. 展示薬剤名：プレバソンフロアブル5

【有効成分・主な使用基準】

有効成分	同左含有率	使用時期	使用回数	希釈倍率	その他
クロラントラニリプロール	5.0%	収穫7日前まで	2回以内	4,000倍	

2. 普及展示のねらい

マメシクイガに対する防除効果と普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所 花巻市太田

(2) 対象病害虫 マメシクイガ

(3) 耕種概要

ア 品種：ナンブシロメ

イ 播種日：6/24～27

ウ 播種方法：畝立て播種（えだまめ仕様の畝形成）

エ 栽植様式：株間21cm×畝間75cm、1粒播き

オ 施肥等：豚ふんたい肥2t/10a、穀類専用肥料（全層）30kg/10a

カ 前年の状況：被害粒率11%（8月25日スミチオン乳剤）

(4) 普及展示規模

ア 展示区 20a（大豆1年目、前作小麦）、

イ 対照区 20a（大豆1年目、前作小麦）

ウ 参考区 10a（連作、大豆3年目）

(5) 散布時期、量、方法

	薬剤名	処理時期	処理回数	処理量	使用方法
展示区	プレバソンフロアブル5	8/26	1回	4,000倍 150L/10a	散布
対照区	アディオオン乳剤	8/26	1回	3,000倍 150L/10a	
参考区 (連作)	プレバソンフロアブル5	8/26	1回	4,000倍 150L/10a	

※紫斑病防除：1回目（8/26）マネージD F（別途）、2回目（9/8）ベルコートフロアブル。

(6) 調査月日、方法

ア H26/10/30に、1区あたり2カ所から各10茎（計20茎）を無作為に抜き取った。

イ 脱穀後、稔実粒について被害粒を調査し、被害粒率を算出した。

4. 展示成績

区名	薬剤名		調査粒数 (粒)	マメシクイガ	
				被害粒数 (粒)	被害粒率 (%)
展示区	プレバソフロアブル5	A	1,427	8	0.6
		B	2,134	7	0.3
		計	3,561	15	0.4
対照区	アディオン乳剤	A	1720	27	1.6
		B	1550	16	1.0
		計	3,270	43	1.3
参考区 (連作)	プレバソフロアブル5	A	1,979	25	1.3
		B	2,119	184	8.7
		計	4,098	209	5.0

5. 考察

今年度の大豆の生育は全体的に旺盛であり、展示区、対照区とも開花期以降、蔓化、倒伏傾向にあった。このような条件下でも展示薬剤は対照薬剤に比較してマメシクイガの被害粒率は低く、十分な防除効果が認められた。

なお、参考に設けた連作圃場の成績では、連作等で害虫密度が高い場合は1回防除では不十分であることが示された。

6. 普及性

展示薬剤はマメシクイガ対策として対照薬剤と同等以上の効果があり、普及性は見込める。更に、薬剤の選択肢が増えること、適期散布幅が広がるという利点もある。

防除暦に展示薬剤を採用するにあたり、カメムシ等への防除効果がないこと、連作圃場などマメシクイガの密度が高い圃場での位置付け等、検討する必要がある。

作物名 未成熟とうもろこし 対象病害虫 アワノメイガ

公所名：八幡平農業改良普及センター
担当者：菊池奈美

1. 展示薬剤名

プレバソンフロアブル5

2. 普及展示のねらい

「アワノメイガ」に対する防除効果と普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所：八幡平市大更

(2) 対象病害虫：アワノメイガ

(3) 耕種概要

品種：ゴールドラッシュ

栽植密度：120 c m × 40 c m × 2条

(マルチは9240の白を使用)

播種日：5/5

収穫日：7/27、7/30

防除前歴：モスピラン顆粒水溶剤、6/30散布、4,000倍

(展示区・対照区ともに散布、アブラムシ対策、展着剤加用、ネオニコチノイド系)

(4) 普及展示規模：20 a (対照区10 a、展示区10a)

(5) 散布時期、量、方法

薬剤名	処理時期	処理回数	処理量	使用方法
展示区：プレバソンフロアブル5	7/5	1回	2,000倍 200L/10a	畦畔噴口 で散布
対照区：トレボン乳剤 (慣行薬剤)	7/5	1回	1,000倍 200L/10a	

* 展示区・対照区とも殺菌剤との混用なし、展着剤加用。

* 散布時期は農家慣行の防除時期で、第1世代発生盛期(概ね7月第1半旬頃)。

(6) 調査月日、方法

7/17(散布12日後)と7/30(散布25日後)に、1区あたり40株の主茎について、食害雄穂数、食入茎数を調査し、食害雄穂率、食入茎率を算出する。

(7) 普及展示上の注意点

本剤はジアミド系薬剤であり、抵抗性害虫発生リスク低減の観点から、展示にあたっては連用しないよう注意すること。

4. 展示成績

供試薬剤	調査株数 (株)	調査穂数 (穂)	12日後		25日後	
			食害雄穂率 (%)	食入莖率 (%)	食害雄穂率 (%)	食入莖率 (%)
展示区 プレバソフロアブル5	40	40	2.5	2.5	10	2.5
対照区 トレボン乳剤	40	40	10	10	12.5	15

5. 考察

- (1) アワノメイガ少発生条件下の展示試験となったが、散布12日後の調査では、食害雄穂率、食入莖率とも対照区に比べ展示区で少なかった。
- (2) 展示薬剤の食害雄穂率は散布12日後から25日後にかけて2.5%から10%へ増加した。一方、食入莖率は散布12日後から25日後にかけて2.5%のまま変わらず、防除効果が持続していると考えられる。
- (3) 出荷する雌穂へのアワノメイガの食害は両区ともほぼ見られなかった。
- (4) 薬害は無かった。

6. 普及性

- (1) 展示薬剤は慣行薬剤に比べ面積あたりの薬剤費が低く、普及性が高いと考えられる。
- (2) 展示薬剤はアブラムシに効果がないため、アブラムシの多発時は別途対象薬剤を散布する必要がある。

平成26年度農薬展示圃成績総括（畑作物）

公所名：中央農業改良普及センター県域普及グループ
担当者：小綿寿志

作物名：小麦

○農薬名：シナジオ乳剤

1. 一関1カ所での検討。
2. 長雨等により例年より10日播種が遅れたこと、また、根雪期間が長かったこと、越冬後かなり干ばつ傾向が続いたことなどにより、雑草の発生が展示・対照ともごく少なかった。
3. 葉害の発生もなく、対照薬剤と同等の除草効果が認められると推測される。ただし、多発条件については検討できていないことに留意が必要。

作物名：だいず

○農薬名：プレバソフロアブル5

1. 中央地域1カ所での検討。
2. 前年多発した経営体で実施。対照剤と比べマメシクイガ被害粒率は低く、十分な効果が期待できる。
3. 参考区として設けた連作圃場の成績より、連作等で害虫密度が高い場合は2回防除が必要であることが示唆された。

作物名 トマト 対象病虫害 うどんこ病、灰色かび病

公所名：八幡平農業改良普及センター

担当者：後藤純子

1. 展示薬剤名

アフエットフロアブル（ベンチオピラド 20%）

2. 普及展示のねらい

トマトのうどんこ病及び灰色かび病に対する防除効果の確認及び普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所：八幡平市大更

(2) 対象病虫害：うどんこ病、灰色かび病

(3) 耕種概要：雨よけ普通栽培

①品種：桃太郎サニー（自根）

②播種：3/3 、定植5/6

③栽植様式：株間50cm×110cm、2条 420株/2a

④施肥量 基肥：なし（土壌診断結果に基づく）

追肥：5/27（第3花房開花頃）開始、液肥2号等を原液2 $\frac{1}{2}$ ℓ/10a・回

⑤防除前歴：7/ 7 ベルコートフロアブル2000倍＋コテツフロアブル2000倍

7/14 カリグリーン800倍＋ジェイエース水溶剤1000倍

(4) 普及展示規模

展示区1a、対照区1a

(5) 散布時期、量、方法

農薬名	散布時期	散布回数	希釈倍数	散布量、方法
1（展示） アフエットフロアブル	7/23 （発病前）	1回	2000倍	150 $\frac{1}{2}$ ℓ/10a 肩掛け噴霧器
2（対照） ダコニール1000	7/23 （発病前）	1回	1000倍	150 $\frac{1}{2}$ ℓ/10a 肩掛け噴霧器

*両区とも展着剤（まくびか5,000倍）を加用した。殺虫剤等との混用はなかった。

(6) 調査月日、方法

①各区2カ所の10株について、1株当たり任意の葉5枚を発病程度別に調査し、発病葉率及び発病度を算出した。あわせて、薬害の有無も確認した。

②調査時期は、散布直前（7/23）、散布7日後（7/30）の2回とした。

発病度 = { Σ （程度別発病葉数×指数） / （調査葉数） × 4 } × 100

*指数 0:無病徴

1:病斑面積率が葉面積の5%未満

2:病斑面積率が葉面積の5～25%未満

3:病斑面積率が葉面積の25～50%未満

4:病斑面積率が葉面積の50%以上

(7) 普及展示上の注意点

本剤はSDHI剤であり、耐性菌発現リスク低減の観点から、同系の薬剤を含めて栽培期間中1回の散布とすること。

うどんこ病については、発生後の散布では効果が劣ることから、現地の発生時期を考慮して散布時期を決定した。

4. 展示成績

農薬名	病害名	調査 葉数	発病葉率%		発病度		薬害
			散布直前 (7/23)	散布7日後 (7/30)	散布直前 (7/23)	散布7日後 (7/30)	散布7日後 (7/30)
1 (展示) アフエット フロアブル	うどんこ病	50	0	0	0	0	—
		50	0	0	0	0	—
		平均	0	0	0	0	—
	灰色かび病	50	0	4	0	2.5	—
		50	0	16	0	8.0	—
		平均	0	10.0	0	5.3	—
2 (対照) ダコニール 1000	うどんこ病	50	0	0	0	0	—
		50	0	0	0	0	—
		平均	0	0	0	0	—
	灰色かび病	50	0	30	0	15.0	—
		50	0	25	0	12.5	—
		平均	0	27.5	0	13.8	—

5. 考察

(1) うどんこ病

展示区、対照区ともうどんこ病は確認されず、効果は判然としなかった。

(2) 灰色かび病

散布7日後には展示区、対照区ともに葉先枯れから感染した灰色かび病が確認された。

発症程度は軽いものの、発病葉率及び発病度ともに展示区の方が少なく、対照薬剤より防除効果が高いと思われた。

(3) 薬害は両区ともに認められなかった。

6. 普及性

展示薬剤は農家慣行の殺菌剤とは別系統であり、薬剤の選択肢を増やすうえで有望である。

一方で、当地域において広く使用されている他の殺菌剤と比較しても薬価が高めであることから、普及にはコストに見合う防除体系の提示が求められる。

作物名 ピーマン 対象病害虫 アザミウマ類

公所名：奥州農業改良普及センター
担当者：岩渕久代

1. 展示薬剤名 ディアナSC (スピネトラム11.7%)

2. 普及展示のねらい

ピーマンのアザミウマ類に対する防除効果の確認及び普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所：奥州市水沢区

(2) 対象病害虫：アザミウマ類

(3) 耕種概要：雨よけ普通栽培

①品種：京鈴（自根）

②定植日：4/26

③栽植距離：180cm×40cm

④施肥量 (kg/10 a) たい肥 (秋・春施用)

基肥 窒素:15kg

追肥 窒素:4kg

※リン酸、カリ過剰につき窒素のみの施肥

(4) 普及展示規模：展示区3.5a (3×36間)、対照区4.6a (4×36間)

(5) 散布時期、量、方法

農薬名	散布時期 (使用時期)	散布 回数	希釈倍数	その他
1. (展示) ディアナSC	7/3	1回*	5000倍	300 ^{リットル} /10a
2. (対照) コテツフロアブル	7/3	1回*	2000倍	300 ^{リットル} /10a

*農薬登録上の使用回数は2回以内

①両区ともCa剤 (バイカルティ1,000倍)、展着剤 (まくびか3,000倍)を混用。

②近隣散布 (6/27) モスピラン顆粒水溶剤4,000倍+ジーファイン水和剤1,000倍

(6) 調査月日、方法

①各区2ヶ所からまんべんなく任意の10花について、70%エタノールの入ったビニール袋に叩き落とし法によりアザミウマ類を捕獲し、成虫と幼虫別に寄生虫数を調査した。

②薬害については、達観調査とした。

③調査時期は、散布直前 (7/2)、散布7日後 (7/10) の2回とした。

(7) 普及展示上の注意点

本剤はスピノエース顆粒水和剤 (スピノサド) と同系統であることから、展示にあたっては同系薬剤の連用散布とならないよう注意した。

4. 展示成績

	調査 花数	散布直前(7/2)			散布7日後(7/10)			
		成虫数	幼虫数	虫数計	成虫数	幼虫数	虫数計	薬害
1. (展示) ディアナSC	10	45	24	69	1	1	2	無
	10	34	9	43	10	3	13	無
	平均	39.5	16.5	56	5.5	2	7.5	無
2. (対照) コテツフロアブル	10	20	5	25	13	2	15	無
	10	37	17	54	9	0	9	無
	平均	28.5	11	39.5	11	1	12	無

※薬害については有、無で記載

5. 考察

- (1) 散布直前のアザミウマ類の発生量は展示区が多い状況での試験であったが、散布1週間後の虫数は、展示区が対照区より成虫、幼虫ともに減少しており、展示薬剤の効果は対象薬剤と同等からやや高いと推察された。
- (2) 葉斑軽減、尻腐果対策のために、Ca剤、展着剤を混用したが、散布後の薬害は見られなかった。
- (3) 展示農家も、アザミウマ類に対する防除効果を高く評価していた。

6. 普及性

展示薬剤のアザミウマ類に対する防除効果は対象薬剤と同等かやや高いと推察され、同系のスピノエース顆粒水和剤より安価でコスト低減も期待できることから、普及性は高いと考えられる。

作物名 ピーマン 対象病害虫 アザミウマ類

公所名：大船渡農業改良普及センター

担当者：島田真璃奈

1. 展示薬剤名 ディアナSC (スピネトラム11.7%)

2. 普及展示のねらい

ピーマンのアザミウマ類に対する防除効果の確認及び普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所 : 大船渡市日頃市

(2) 対象病害虫 : アザミウマ類

(3) 耕種概要 : 雨よけ普通栽培

①品種 「京ゆたか」(自根)

②定植日 : 4/9

③収穫開始 : 6/2

④栽植様式 畝幅140cm×株間45cm 1条植 4本仕立て

⑤施肥 10aあたり成分量 たい肥 (豚ふんたい肥 春施用)

(基肥) 窒素30kg、リン酸0kg、カリ19.5kg

※土壌診断結果に基づき減肥

(追肥) 農家慣行による

(4) 普及展示規模 : 展示区、対照区とも2a

(5) 散布時期、量、方法

農薬名	散布時期 (使用時期)	散布 回数	希釈倍数	その他
1. (展示) ディアナSC	9/3	1回*	5000倍	250 ^{リットル} /10a
2. (対照) スピノエース顆粒水和剤	9/3	1回	5000倍	250 ^{リットル} /10a

*農薬登録上の使用回数は2回以内

①両区とも展着剤(まくぴか 5000倍)を加用。

②近隣散布(8/26) カスミンボルドー(1000倍) + コテツフロアブル(2000倍) + 展着剤「まくぴか」(5000倍)

(6) 調査月日、方法

①調査時期は、散布直前(9/3)、散布7日後(9/10)の2回とした。

②各区2ヶ所からまんべんなく任意の10花について、70%エタノールが入ったビニール袋に叩き落とし法によりアザミウマ類を捕獲し、成虫と幼虫別に寄生虫数を調査した。

③葉害は、達観調査とした。

(7) 普及展示上の注意点

本剤はスピノエース顆粒水和剤(スピノサド)と同系統であることから、展示にあたっては同系薬剤の連用散布とならないよう注意した。

4. 展示成績

	調査 花数	散布直前(9/3)			散布7日後(9/10)			
		成虫数	幼虫数	虫数計	成虫数	幼虫数	虫数計	薬害
1. (展示) ディアナSC	10	0	0	0	0	0	0	無
	10	0	0	0	0	0	0	無
	平均	0	0	0	0	0	0	無
2. (対照) スピノエース 顆粒水和剤	10	0	0	0	0	0	0	無
	10	0	0	0	0	0	0	無
	平均	0	0	0	0	0	0	無

※薬害については有、無で記載

5. 考察

- (1) 展示場所はアザミウマ類の発生が確認されず、発生を待って散布することとしていたため、この時期の展示試験となった。
- (2) アザミウマ類の発生が確認されなかったため、効果は判然としなかった。
- (3) 両区とも薬害の発生は、認められなかった。

6. 普及性

この展示試験での薬剤の効果は判然としなかったが、管内他実証圃で対照薬剤と同等の効果が確認されていること、同系の薬剤より安価でコスト低減も期待できることから、大船渡地域でも普及性があると考えられる。

作物名 ピーマン 対象病害虫 アザミウマ類

公所名：大船渡農業改良普及センター
担当者：島田真璃奈

1. 展示薬剤名 ディアナSC (スピネトラム11.7%)

2. 普及展示のねらい

ピーマンのアザミウマ類に対する防除効果の確認及び普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所：大槌町金沢

(2) 対象病害虫：アザミウマ類

(3) 耕種概要：雨よけ普通栽培

①品種 「京ゆたか」(自根)

②定植日：4/14

③収穫開始：6/18

④栽植様式 畝幅140cm 株間45cm 1条植 4本仕立て

⑤施肥 10aあたり成分量 たい肥 (牛ふんたい肥 春施用)

(基肥) 窒素 19.5kg、リン酸 16kg、カリ 14.2kg

(追肥) 農家慣行による

(4) 普及展示規模：展示区、対照区とも1a

(5) 散布時期、量、方法

農薬名	散布時期 (使用時期)	散布 回数	希釈倍数	その他
1. (展示) ディアナSC	7/15	1回*	5000倍	300 $\frac{g}{L}$ /10a
2. (対照) スピノエース顆粒水和剤	7/15	1回	5000倍	300 $\frac{g}{L}$ /10a

*農薬登録上の使用回数は2回以内

①両区とも展着剤(まくびか 5000倍)を加用。

②近隣散布(6/30)モスピラン水溶剤(4000倍)

(6) 調査月日、方法

①調査時期は、散布直前(7/15)、散布7日後(7/22)2回とした。

②各区2ヶ所からまんべんなく任意の10花について、70%エタノールが入ったビニール袋に叩き落とし法によりアザミウマ類を捕獲し、成虫と幼虫別に寄生虫数を調査した。

③葉害は、達観調査とした。

(7) 普及展示上の注意点

本剤はスピノエース顆粒水和剤(スピノサド)と同系統であることから、展示にあたっては同系薬剤の連用散布とならないよう注意した。

4. 展示成績

	調査 花数	散布直前(7/15)			散布7日後(7/22)			
		成虫数	幼虫数	虫数計	成虫数	幼虫数	虫数計	薬害
1. (展示) ディアナSC	10	44	54	98	11	3	14	無
	10	74	60	134	6	3	9	無
	平均	59	57	116	8.5	3	11.5	無
2. (対照) スピノエース顆粒 水和剤	10	85	65	150	19	8	27	無
	10	45	56	101	8	3	11	無
	平均	65	60.5	125.5	13.5	5.5	19	無

※薬害については有、無で記載

5. 考察

- (1) 散布時期が、アザミウマ類の発生が急増した時期となり、一花あたりの頭数も多い中での展示試験となったが、展示剤は、成虫、幼虫ともに対照剤と概ね同程度減少していることから、同等の効果があると思われた。
- (2) 両区とも薬害の発生は、認められなかった。
- (3) 展示農家では、アザミウマ類の効果について高く評価している。

6. 普及性

展示剤は、対照剤とほぼ同等の効果が得られ、薬害も認められず、同系の薬剤より安価でコスト低減も期待できることから、普及性は高いと考えられる。

作物名 キャベツ 対象病害虫 ヨトウムシ

公所名：大船渡農業改良普及センター
担当者：菊池絃子

1. 展示薬剤名 ディアナSC (スピネトラム11.7%)

2. 普及展示のねらい

キャベツのヨトウムシに対する防除効果の確認及び普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所：気仙郡住田町下有住

(2) 対象病害虫：ヨトウムシ

(3) 耕種概要

①品種名：「雪中」「冬のぼり」「冬くぐり」「夢ごろも」

②定植日：8/16、17

③栽植距離：畝間130cm×株間35cm・1条植え (マルチ栽培)

④施肥量：たい肥 発酵鶏糞 500kg/10a

基肥 MMB磷加安262号 80kg/10a (窒素9.6kg、リン酸12.8kg、加里9.6kg)

⑤直近の防除：9/8 オルトラン水和剤 1,000倍+ダコニール1000 1,000倍

(4) 普及展示規模

展示区、対照区 各1a

(5) 散布時期、量、方法

農薬名	散布時期 (使用時期)	散布回数	希釈倍数	その他
1. (展示) ディアナSC	9/27	1回*	5,000倍	150 $\frac{1}{10}$ g/10a
2. (対照) プレオフロアブル	9/27	1回	1,000倍	150 $\frac{1}{10}$ g/10a

※農薬登録上の使用回数は2回以内

・展着剤 (マイリノー5,000倍) を加用した。

(6) 調査月日、方法

①各区2カ所から20株について、ヨトウムシの寄生虫数 (若～中齢幼虫) を調査した。

②調査は散布直前 (9/22)、散布6日後 (10/3)、散布12日後 (10/9) とした (台風の接近に伴い実証農家の都合が変更となり、散布直前の調査から5日後の散布となった)。

③薬害は、達観調査とした。

(7) 普及展示上の注意点

①ヨトウムシ類の種を確認した。

②本剤はスピノエース顆粒水和剤 (スピノサド) と同系統であることから、展示にあたっては同系薬剤の連用散布とならないよう注意した。

4. 展示成績

農薬名	害虫名	調査株数	株あたり寄生虫数		
			散布直前 (9/22)	散布6日後 (10/3)	散布12日後 (10/9)
1. (展示) ディアナSC	ヨトウムシ	20	2.8	0.3	0.0
		20	1.9	0.4	0.0
		平均	2.3	0.3	0.0
2. (対照) プレオフロアブル	ヨトウムシ	20	2.3	0.3	0.1
		20	7.1	0.3	0.1
		平均	4.7	0.3	0.1

※当初設置を予定していた圃場は生育が遅く、害虫の発生が認められなかったため、隣接の品種比較実証を行っていた圃場へ区を設置した。なお、品種による生育及び食害程度に大きな差は見られなかった。

5. 考察

- (1) 卵塊および幼虫を確認したところ、発生種はヨトウムシであった。
- (2) 散布直前調査では展示区、対照区ともに孵化直後および若齢幼虫の寄生が多く見られたが、散布6日後および12日後調査では、展示区、対照区共に寄生虫数は減少し、対照薬剤と同等の防除効果が認められた。
- (2) 葉害の発生は、認められなかった。
- (3) 展示農家の達観では、展示区、対照区ともに防除効果は同等との評価であった。

6. 普及性

当地域の冬どりキャベツの作型において、9月下旬のヨトウムシに対する防除効果が対照薬剤と同等であり、慣行防除薬剤とは異なる系統であることから、ローテーションの一剤として普及性がある。

作物名 だいこん 対象病害虫 アオムシ (キスジノミハムシ)

公所名：宮古農業改良普及センター
担当者：竹澤利和

1. 展示薬剤名 パダンSG水溶剤 (カルタップ 75%)
2. 普及展示のねらい
だいこんのアオムシ(キスジノミハムシ)に対する防除効果の確認及び普及性を検討する。

3. 普及展示方法

- (1) 展示場所 : 宮古市区界
- (2) 対象病害虫 : アオムシ (キスジノミハムシ)
- (3) 耕種概要 ①品種名：貴宮
②播種日：6/28
③栽植様式：露地、条間60cm×株間27cm
④施肥量(kg/10a)：窒素4.8、リン酸12.6、カリ4.8
⑤展示農薬以外の防除暦：播種時フォース粒剤4kg/10a、7/14エルサン乳剤1000倍150ℓ/10a、7/25ハチハチ乳剤2000倍200ℓ/10a、8/13スタークル顆粒水和剤3000倍200ℓ/10a
- (4) 普及展示規模： 展示区、対照区とも5 a
- (5) 散布時期、量、方法

農薬名	散布時期 (使用時期)	散布回数	希釈倍数	その他
1. (展示) パダンSG水溶剤	播種38日後 (8/5)	1回*	1500倍	200 $\frac{1}{2}$ ℓ/10a
2. (対照) モスピラン水溶剤	播種38日後 (8/5)	1回	2000倍	200 $\frac{1}{2}$ ℓ/10a

*農薬登録上の使用回数は3回以内

※展示農薬、対照農薬ともに殺菌剤、展着剤の混用はない。

(6) 調査月日、方法

- ①アオムシ：各区2カ所の25株について、中～老齢幼虫の寄生虫数を調査した。
- ②キスジノミハムシ：各区2カ所の10株について、根部における食害痕の有無を調べ、被害株率及び被害度を算出した。
- ③調査時期：散布直前(8/4)、散布14日後(8/19)の2回とした。
- 被害度 = $\{ \sum (\text{程度別被害株数} \times \text{指数}) / (\text{調査株数} \times 4) \} \times 100$
- 指数 0：無病徴 1：根部の被害がわずか(数個)に認められる
2：根部の被害が表面積の25%未満 3：根部の被害が表面積の25～50%未満
4：根部の被害が表面積の50%以上

(7) 普及展示上の注意点

飛来性の害虫であるため、展示区、対照区の散布日を出来るだけ同日となるようにすること。キスジノミハムシ多発圃場においては、播種時粒剤使用20日後より茎葉散布を開始し、その後7～10日おきに薬剤散布を行うことで被害を少なくすることが出来る(H25研究

成果)。

4. 展示成績

農薬名	害虫名	調査株数	寄生虫数		被害株率(%)		被害度	
			散布直前 (8/4)	散布14日後 (8/19)	散布直前 (8/4)	散布14日後 (8/19)	散布直前 (8/4)	散布14日後 (8/19)
1. (展示) パダンSG 水溶剤	アオムシ	25	0	0				
		25	0	0				
		平均	0	0				
	(キスジノ ミハムシ)	10			0	10	0	2.5
		10			0	10	0	2.5
		平均			0	10	0	2.5
2. (対照) モスピラン 水溶剤	アオムシ	25	0	0				
		25	0	0				
		平均	0	0				
	(キスジノ ミハムシ)	10			0	10	0	2.5
		10			0	10	0	2.5
		平均			0	10	0	2.5

※キスジノミハムシについては、収穫時の被害状況を達観で確認し考察すること。

5. 考察

- (1) 播種から収穫までの展示期間を通じた全般的傾向として、展示区、対照区ともに害虫の発生はほとんど認められず、アオムシ等に起因する葉の食害も僅かに認められる程度であった。
- (2) アオムシについては、散布直前及び散布14日後調査いずれにおいても、展示区、対照区ともに発生はなかった。
- (3) キスジノミハムシについては、両区とも散布直前は発生・食害とも見られず、散布14日後調査でも被害株率10%、被害度2.5と軽微であった。
- (4) 農家判断により散布8日後(8/13)にスタークル顆粒水和剤を散布した影響から、アオムシに対する両剤の効果は判然としなかった。キスジノミハムシについては、体系防除を行った中で対照薬剤と同等の効果があるものと推察される。
- (5) 収穫時の被害状況を達観で確認することとされていたが、だいこんの生育が早く、散布14日後の翌日(8/20)から収穫開始となったことから、収穫時調査を省略した。

6. 普及性

展示薬剤の効果は判然としなかったものの、近年展示地区では、播種時粒剤使用20日後より茎葉散布を開始し、その後7~10日おきに播種40日後頃まで薬剤散布を行っても、キスジノミハムシ多発時の被害を抑制することが困難となっており、収穫7日前までの散布が可能な展示薬剤を新たに防除体系に組み込めることは、大変意義がある。

また、展示薬剤は対照薬剤に比較して価格も比較的安価であること、慣行薬剤とは系統が異なる薬剤であることから、アオムシ(キスジノミハムシ)防除薬剤としての普及性は高いと考えられる。

作物名 だいこん 対象病害虫 アオムシ (キスジノミハムシ)

公所名：宮古農業改良普及センター(岩泉)
担当者：高橋大輔

1. 展示薬剤名 パダンSG水溶剤 (カルタップ 75%)
2. 普及展示のねらい
だいこんのアオムシ(キスジノミハムシ)に対する防除効果の確認及び普及性を検討する。

3. 普及展示方法

- (1) 展示場所 : 下閉伊郡岩泉町小本字大牛内
- (2) 対象病害虫 : アオムシ (キスジノミハムシ)
- (3) 耕種概要 : ①品種 「夏つかさ」
②播種期 7/15
③栽植様式 マルチ栽培、2条植え (株間27cm×条間40cm)
④施肥量 窒素-リン酸-カリ : 3.1-12.0-0.0 (kg/10a)
※土壌診断結果を受けての減肥
⑤防除実績 播種時 : フォース粒剤、ダイアジノン粒剤5、フロキサ
イド粉剤、ネマキック粒剤
散布防除 : ハチハチ乳剤 (8/5)、Zボルドー (8/5)
- (4) 普及展示規模 : 展示区、対照区とも5a

(5) 散布時期、量、方法

農薬名	散布時期 (使用時期)	散布 回数	希釈倍数	その他
1. (展示) パダンSG水溶剤**	播種38日後 (8/22)	1回*	1500倍	150 ^{リットル} /10a
2. (対照) スタークル顆粒水溶剤**	播種38日後 (8/22)	1回	1000倍	150 ^{リットル} /10a

* 農薬登録上の使用回数は3回以内

**殺菌剤 (Zボルドー 500倍)、展着剤 (ハイテンパワー 10000倍) を加用。

(6) 調査月日、方法

- ①アオムシ : 各区2カ所の25株について、中～老齢幼虫の寄生虫数を調査した。
- ②キスジノミハムシ : 各区2カ所の10株について、根部における食害痕の有無を調べ、被害株率及び被害度を算出した。
- ③調査時期は、散布直前、散布10日後の2回とする。

(用務重複のため散布12日後での調査を実施)

被害度 = { Σ (程度別被害株数×指数) / (調査株数×4) } × 100

指数 0 : 無病徴 1 : 根部の被害がわずか(数個)に認められる

2 : 根部の被害が表面積の25%未満 3 : 根部の被害が表面積の25～50%未満

4 : 根部の被害が表面積の50%以上

(7) 普及展示上の注意点

飛来性の害虫であるため、展示区、対照区の散布日を出来るだけ同日となるようにすること。キスジノミハムシ多発圃場においては、播種時粒剤使用20日後より茎葉散布を開始

し、その後7～10日おきに薬剤散布を行うことで被害を少なくすることが出来る。(H25研究成果)

4. 展示成績

農薬名	害虫名	調査株数	寄生虫数		被害株率(%)		被害度	
			散布直前(8/20)	散布12日後(9/3)	散布直前(8/20)	散布12日後(9/3)	散布直前(8/20)	散布12日後(9/3)
1. (展示) パダンSG 水溶剤	アオムシ	25	5	0				
		25	10	0				
		平均	7.5	0.0				
	(キスジノミハムシ)	10			10	40	7.5	12.5
		10			0	0	0	0
		平均			5.0	20.0	3.8	6.3
2. (対照) スタークル 顆粒水溶剤	アオムシ	25	6	1				
		25	5	0				
		平均	5.5	0.5				
	(キスジノミハムシ)	10			0	0	0	0
		10			10	40	2.5	17.5
		平均			5.0	20.0	1.3	8.8

5. 考察

(1) アオムシ

対照薬剤に対し同等～優れる効果があると見込まれる。

(2) キスジノミハムシ

散布12日後の根部被害状況については、両区に大きな差は見られず、達観ではあるが新規展開葉への成虫の食痕が見られなかったことから、対照薬剤と同等の効果があると見込まれる。

なお、散布12日後調査時の被害が進行形であり被害拡大が予測されたことから、収穫予定日より早かったものの調査翌日より収穫を開始しており、収穫時の根部被害状況調査は2回目調査と同一の評価となる。

薬剤散布前から散布後にかけて被害が増加した原因として、前回防除(8/5)から長雨のために防除間隔が空いたことで、展示薬剤散布時には既に産卵が終わっていたことが考えられる。

6. 普及性

パダンSG水溶剤は地域の防除体系に採用されている薬剤とは成分系統が異なり、使用時期も収穫7日前までと収穫期に近づいても使用できるため、生育後半の防除ローテーションに組み入れ易い剤と考えられる。また、薬剤単価が安く希釈倍率も1500倍と高いことから防除コストの低減も期待でき、普及性は高いと考えられる。

作物名 レタス 対象病虫害 すそ枯病（灰色かび病）

公所名：二戸農業改良普及センター
担当者：千田 裕

1. 展示薬剤名 シグナムWDG（ピラクロストロビン6.7%、ボスカリド26.7%）

2. 普及展示のねらい

レタスすそ枯病（灰色かび病）に対する防除効果の確認及び普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所 一戸町奥中山

(2) 対象病虫害 すそ枯病（灰色かび病）

(3) 耕種概要

①供試品種 : サクセスクラシック

②播種日 : 5月7日

③定植日 : 6月6日

④栽植様式 : 株間24cm、畝幅60cm、2条植え

⑤施肥量(10aあたり) : 窒素12.0kg、リン酸16.0kg、カリ12.0kg

(4) 普及展示規模 展示区1a、対照区1a

(5) 散布時期、量、方法

農薬名	散布時期 (使用時期)	散布回数	希釈倍率	その他
1. (展示) シグナムWDG	6月20日 (結球開始前)	1回	1500倍	300 ^{リットル} /10a
2. (対照) ロブラール水和剤	6月20日 (結球開始前)	1回	1000倍	300 ^{リットル} /10a

*両区とも展着剤（ハイテンパワー5,000倍）を加用した。殺虫剤との混用は行わなかった。

(6) 調査月日、方法

①各区2ヵ所から20株について株ごとに発病程度別に調査し、発病株率及び発病度を算出した。

②すそ枯病は、散布直前、収穫直前の2回調査とした。

③灰色かび病は、散布直前、散布7日後の2回調査とした。

④同時に斑点病に対する防除効果についても、散布21日後に調査した。

灰色かび病、すそ枯病：発病度 = $\{ \sum (\text{程度別発病株数} \times \text{指数}) / (\text{調査株数} \times 3) \} \times 100$

発病指数 0：無発病、1：外葉1枚に発病する、2：外葉2～4枚未満に発病する、
3：外葉の5枚以上と結球葉にも発病する

斑点病：発病度 = $\{ \sum (\text{程度別発病葉数} \times \text{指数}) / (\text{調査葉数} \times 4) \} \times 100$

発病指数 0：無病徴 1：病斑面積率が葉面積の5%未満
2：病斑面積率が葉面積の5～25%未満 3：病斑面積率が葉面積の25～50%未満
4：病斑面積率が葉面積の50%以上

(7) 普及展示上の注意点

本剤はQoI剤・SDHI剤の混合剤であり、耐性菌発現リスク低減の観点から同系薬剤の連用散布にならないよう展示にあたっては注意した。

4. 展示成績

<すそ枯病>

農薬名	病害名	調査株数	発病株率 (%)		発病度	
			散布直前 (6月20日)	収穫直前 (7月22日)	散布直前 (6月20日)	収穫直前 (7月22日)
1. (展示) シグナム WDG	すそ枯病	20	0.0	0.0	0.0	0.0
		20	0.0	0.0	0.0	0.0
		平均	0.0	0.0	0.0	0.0
2. (対照) ロブラー ル水和剤	すそ枯病	20	0.0	0.0	0.0	0.0
		20	0.0	0.0	0.0	0.0
		平均	0.0	0.0	0.0	0.0

<灰色かび病>

農薬名	病害名	調査株数	発病株率 (%)		発病度	
			散布直前 (6月20日)	散布7日後 (6月27日)	散布直前 (6月20日)	散布7日後 (6月27日)
1. (展示) シグナム WDG	灰色かび病	20	0.0	0.0	0.0	0.0
		20	0.0	0.0	0.0	0.0
		平均	0.0	0.0	0.0	0.0
2. (対照) ロブラー ル水和剤	灰色かび病	20	0.0	0.0	0.0	0.0
		20	0.0	0.0	0.0	0.0
		平均	0.0	0.0	0.0	0.0

【参考】<斑点病>

農薬名	病害名	調査株数	発病株率 (%)		発病度	
			散布直前 (6月20日)	散布21日後 (7月11日)	散布直前 (6月20日)	散布21日後 (7月11日)
1. (展示) シグナム WDG	斑点病	20	20.0	100.0	2.8	22.3
		20	35.0	100.0	14.0	27.5
		平均	27.5	100.0	8.4	24.9
2. (対照) ロブラー ル水和剤	斑点病	20	40.0	100.0	19.2	53.2
		20	5.0	100.0	1.2	42.6
		平均	22.5	100.0	10.2	47.9

※展示薬剤散布後、収穫直前まで殺菌剤の散布は両区とも行っていない。

5. 考察

- (1) 展示を行った6～7月の奥中山地域の降水量は、概ね平年より少なく、灰色かび病、すそ枯病は少発生であった。
- (2) 両区とも灰色かび病、すそ枯病の発生は確認されなかったことから、両病害への防除効果は判然としないものの、同等の効果があつたと推察される。
- (3) 参考までに、同時に発生していた斑点病に対する防除効果については、散布21日後ではすべての調査株に発病が見られたものの、展示区では対照区に比較して上位葉への感染が抑えられており、展示薬剤の斑点病への防除効果が認められた。
- (4) 両区とも薬害は認められなかった。

6. 普及性

すそ枯病、灰色かび病に対する効果は対照薬剤と同等と推察された。また、斑点病に対する同時防除効果も確認され、多様な糸状菌に効果が期待できることから、普及性はあると思われる。

作物名 ほうれんそう 対象病害虫 べと病（白斑病）

公所名：久慈農業改良普及センター
担当者：武田純子

1. 展示薬剤名：ユニフォーム粒剤（アゾキシストロビン2.0%、メタラキシルM1.0%）

2. 普及展示のねらい

べと病（白斑病）に対する防除効果の確認及び普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所：野田村野田

(2) 対象病害虫：べと病（白斑病）

(3) 耕種概要

①品種：スーパースター

②播種日：展示区 6/1、対照区 6/4

③栽植距離：条間14cm×株間7cm

④施肥量（kg/a）：窒素0.64、リン酸0.16、加里0.16

(4) 普及展示規模：展示区1a、対照区1a

(5) 散布時期、量、方法

農薬名	散布時期 (使用時期)	散布回数	処理量	その他
1. (展示) ユニフォーム粒剤	は種時	1回	9kg/10a (全面土壌混和)	
2. (対照) リドミル粒剤2	は種時	1回	9kg/10a (全面土壌混和)	

(6) 調査月日、方法

①各区2ヵ所から25株の1株当たり任意5枚について、発病葉率と発病株率を調査した。

②調査時期は、播種14日後、播種21日後の2回とした。

(7) 普及展示上の注意点

本剤を使用する場合、碎土を良く行った後、所定量の薬剤を均一に散布し、土壌と十分に混和すること。

本剤はQ o I 剤の混合剤であり、耐性菌発現リスク低減の観点から年間使用回数についての検討が必要である。

4. 展示成績

農薬名	病害名	調査 葉数	発病葉率 (%)		調査 株数	発病株率 (%)	
			播種15日後 (6月16日)	播種22日後 (6月23日)		播種15日後 (6月16日)	播種22日後 (6月23日)
1. (展示) ユニフォーム粒剤	べと病	125	0	0	25	0	0
		125	0	0	25	0	0
		平均	0	0	平均	0	0
	(白斑病)	125	0	0	25	0	0
		125	0	0	25	0	0
		平均	0	0	平均	0	0
			播種14日後 (6月18日)	播種21日後 (6月25日)		播種14日後 (6月18日)	播種21日後 (6月25日)
2. (対照) リドミル粒剤2	べと病	125	0	0	25	0	0
		125	0	0	25	0	0
		平均	0	0	平均	0	0
	(白斑病)	125	0	0	25	0	0
		125	0	0	25	0	0
		平均	0	0	平均	0	0

処理月日：展示区6月1日、対照区6月4日

※白斑対象薬剤は無散布。

5. 考察

- (1) ベと病については、同圃場内の粒剤無施用ハウスでは発生が見られ、べと病が発生しやすい環境下での展示試験であったが、展示区、対照区ともにべと病の発生は見られず、展示薬剤は対照薬剤と同等の効果があると考えられた。
- (2) 白斑病については、調査結果からは判然としなかったが、生産者の達観では播種28日後以降、展示区隣接ハウスで白斑病が発生していたこと、展示区、対照区ともに少発生したものの、展示区の発生が少なく、被害拡大は見られなかったことを考慮すると、展示薬剤は白斑病に対して一定の効果があると思われた。
- (3) 葉害は見られなかった。

6. 普及性

べと病に対して対照薬剤と同等の効果があること、白斑病の登録薬剤が少ない中で、①使用方法が省力的であること、②葉害を気にしなくて良いことから防除薬剤の一つとして普及性はあると考えられる。

作物名 ねぎ 対象病害虫 白絹病

公所名：盛岡農業改良普及センター
担当者：阿部亜希子

1. 展示薬剤名 アフェットフロアブル（ペンチオピラド20.0%）

2. 普及展示のねらい

ねぎの白絹病に対する防除効果の確認及び普及性を検討する。

3. 普及展示方法

(1) 展示場所 盛岡市上太田

(2) 対象病害虫 白絹病

(3) 耕種概要

①品 種：ホワイトスター

②定 植 日：4/9～10

③栽植様式：畦幅95cm×株間3cm

④施 肥 量：農家慣行による

(4) 普及展示規模 展示区20 a、対照区3 a

(5) 散布時期、量、方法

農薬名	散布時期 (使用時期)	散布回数	希釈倍率	その他
1. (展示) アフェットフロアブル	7月13日	1回	2000倍	1ℓ/m ² (株元灌注)
2. (対照) ロブラール水和剤	7月13日	1回	1000倍	1ℓ/m ² (株元灌注)

(6) 調査月日、方法

①各区3カ所の20株について、葉鞘の地際部を発病程度別に調査し、発病株率及び発病度を算出した。

②調査は散布直後（7/14）、散布9日後（7/22）の2回実施した。

※薬剤散布後、1週間程度で菌糸が見えなくなるという展示農家からの情報提供により、散布9日後調査を実施した。

発病度 = { Σ (程度別発病株数 × 指数) / (調査株数 × 4) } × 100

指数0：発病なし

1：菌糸が少量認められる

2：菌糸が多量に認められる

3：菌糸が蔓延し菌核の形成が認められる

4：枯死

(7) 普及展示上の注意点

本剤はSDHI剤であり、耐性菌発現リスク低減の観点から、展示にあたっては栽培期間中かん注1回、散布1回の2回以内とし、連用しないようにした。

4. 展示成績

農薬名	病害名	調査株数	発病株率 (%)		発病度	
			散布直後 (7月14日)	散布9日後 (7月22日)	散布直後 (7月14日)	散布9日後 (7月22日)
1. (展示) アフエットフロアブル	白絹病	i 20	15.0	25.0	欠測	7.5
		ii 20	90.0	55.0		33.8
		iii 20	75.0	50.0		30.0
		平均	60.0	43.3		23.8
2. (対照) ロブラール水和剤	白絹病	i 20	45.0	80.0	欠測	45.0
		ii 20	85.0	45.0		22.5
		iii 20	65.0	85.0		45.0
		平均	65.0	70.0		37.5

※散布直後（7/14）の発病程度調査を実施しなかった。達観では両区同程度の発病であり、菌核形成は発病株の4～5割程度であった。

※散布13日後（7/25）にも調査を実施したが、9日後調査時からの病勢の進展は見られなかったことから散布9日後のデータを採用した。

5. 考察

- (1) 初発確認後の散布となり、散布前後の発病株率、発病程度（達観）は両区とも同等であった。散布9日後の調査では、展示区の発病株率、発病度はともに対照区に対して低かった。また、両区とも散布13日後（7/25）には菌糸がほとんど確認できなくなり、枯死に至る被害の発生もなかったことから、展示薬剤は対照薬剤と同等～高い効果があると考えられた。
- (2) 両区とも薬害はなかった。

6. 普及性

- (1) 展示薬剤は、さび病・黒斑病の散布剤としても既に管内防除暦に採用されており、白絹病においても対照薬剤に対して同等以上の効果が認められたこと、対照薬剤より薬価が安くコスト低減が期待できることから、普及性はあると考えられる。
- (2) 株元かん注処理の作業性については、展示農家は特に問題はないとのことで、作業面からも普及性はあると考えられる。

平成26年度農薬展示圃成績総括（野菜）

公所名：中央農業改良普及センター県域普及グループ
担当者：菊池真奈美

作物名：ピーマン

○農薬名：ディアナSC

1. 奥州、大船渡普及センター管内合計3箇所で調査実施。アザミウマ類に対する効果を示し、対照剤と同等の効果が認められた。
2. 本剤はスピノエース顆粒水和剤と同系統であることから、使用に際しては連用しないよう注意すること。また、本剤は同系薬剤に比較して低コストであるほか、ピーマンタバコガにも効果があることが岩手農研の場内試験結果からも明らかになっており、同時防除効果が期待できる。

作物名：だいこん

○農薬名：パダンSG水溶剤

1. 宮古普及センター2箇所で調査実施。アオムシ及びキスジノミハムシに対する効果を示した。アオムシに対する効果は対照剤と同等の効果が認められ、キスジノミハムシについては体系防除として使用し、同等の効果が認められた。
2. 本剤はだいこんに作物登録のある殺虫剤の中でも、収穫前日数が7日前と短いことから、体系防除剤の一剤として普及性が高いと評価された。

作物名：ほうれんそう

○農薬名：ユニフォーム粒剤

1. 久慈普及センターで調査実施。べと病及び白斑病に対する効果を示した。べと病については対照剤と同等の効果があるものの、白斑病については判然としなかった。
2. 本剤は岩手県防除指針に掲載されていないが、メタラキシルMとアゾキシストロビン(QoI剤)の混合剤であり、使用に際しては耐性菌発現リスク低減の観点から年間使用回数
の検討が必要である。